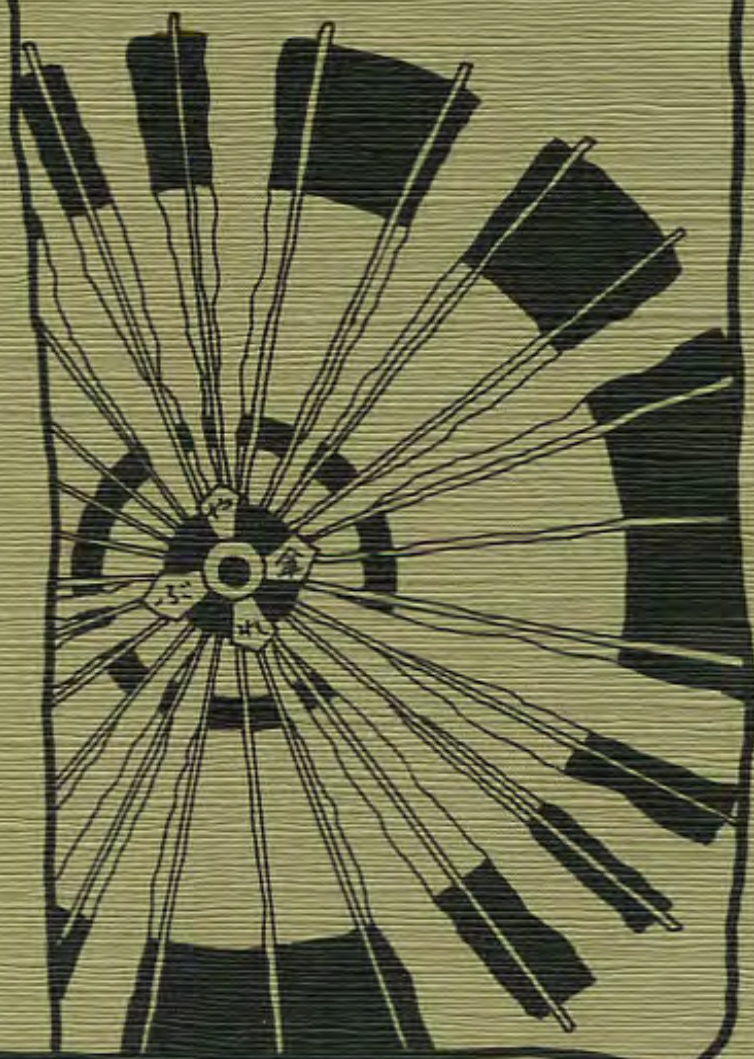


やぶれ傘



九十八号

三〇一七年十月

箱庭の釣竿に糸なかりけり 根橋宏次

鬼やんま羽を合はせて掴まへる きくちきみえ

荒れ畑に丸太ひと山草の花 大島英昭

朝顔のフェンス一面しかも紺 丑久保 勲

自転車を押して人ゆく草の花 廣瀬雅男

夏終はるとこの鍵だかひとつある 青谷小枝

白芙蓉咲く球場の裏ゲート 瀬島酒望

バラソルをくるくるまはし待ちあはせ 天野美登里

山裳を下りて来る風くさひぼり 藤井美晴

雨あがり畑の棒にとんぼふる 白石正躬

交番へ出前の届く秋の昼 安藤久美子

犬が大見てみて秋の蝉の声 小山陽子

ゴムボート浜に掲げられ花火鳴る 渡邊孝彦

新涼やのど越し軽き白ワイン 菊池洋子

二百十日めらめら燃えるベニヤ板 有賀昌子

抄 集 句 傘 大 崎 紀 夫 選

クーラーの効きはどうかと子のメール 秋山信行

抱かれて足をくにゆくにゆ水遊び 松村光典

南瓜炊く使ひ古しの落し蓋 石塚清文

新駅のガラスに写る夏の雲 泉 一九

サングラス表通りに出でてから 木村瑞枝

行く夏の雲の流れの早さかな 黒木東吾

竹筒の香りほのかに水羊羹 齋藤朋子

露草の青を主役に描き終へて 篠崎志津子

炎熱の外を見ている喫茶店 高橋 均

炎昼を重き宅配便届く 萩原久代

風通すただそれだけの夏座敷 武藤節子

夏の朝庭の巣箱で千千千と 森美佐子

戦場ヶ原の木道岩清水 山本久枝

踊りの輪そつと外れてきたりけり 浅嶋 肇

夜学子の机に伏してそのまんま 安斉正蔵

柘榴

大崎紀夫

木と草と道に風吹く蟬しぐれ
秋風はヒマラヤ杉の根元へも
いなびかり林の道は岐れゆき
鶏頭の頭をぽんと叩きけり
秋暑し跨線橋より線路みて

秋じめり亀浮く池の水にごり
二の腕へ新涼きたる午前九時
柘榴より二三の粒が皿の上
牛鳴いて別の牛鳴く赤のまま
竹筒の口へ蛙を落としけり
貴船菊柱に鎖樋の影
零余子とる人に午後の日ありにけり

箱庭

根橋宏次

大箱庭の釣竿に糸なかりけり
三匹の目高が増えも減りもせず
歩くうち歩幅さだまる草の花
ははきぎに雨コーヒーのにほふ朝
掃きながら人降りてくる白木槿
すまふ草うしろの山は雲ばかり
ポスターに日のさす秋の美術展
ひらひらと口細釣られくる厄日
繕ふに菊師が二人がかりにて
秋葉莢を噛めば行く手に海見えて

鬼やんま

きくちきみえ

昼時の向かうのビルの壁に蟬
二車線をわたり切つたる黒揚羽
東京の水に沈んで冷奴
傘の先ぴつたり嵌まる蟬の穴
鬼やんま羽を合はせて擱まへる
枝豆を驚づかみして一人分
味噌味の焼きおにぎりと濁酒
洗濯機回る台風一過かな
大粒が箸を零るる零余子飯
秋の夜の始まる薄きグラスより

草の花

大島英昭

奇術師の鳩が羽ばたく宵祭り
虫喰ひの葉つばは蜘蛛の糸の先
大倉庫脇は竹藪つくつくし
自転車を避けて糸のころ草を踏み
線香を立てて終へたる盆用意
曇り日の雀がさはぐ草の花
ちちろ鳴くメタセコイアの暗がりに
秋しぐれ坂を登つて人がくる
荒れ畑に丸太ひと山草の花
菊芋が咲けり向かひは鉄工所

朝顔

丑久保勲

カフェのある美術館へと日の盛り
片陰を保育園児は一列に
年寄は防犯係盆踊り
稲光り花屋のドアは開いてゐる
遠花火ケーキを買つて店を出る
朝顔のフェンス一面しかも紺
新涼のそば屋蠅取りリボン揺れ
天て神ん社じの紙垂新しき鱒雲
鮎かじる串を両手で持ちながら
楽屋口開いてチェリスト虫のこゑ

草の花

廣瀬雅男

川風を残し夕立の去りにけり
網を引く振りの揃ひし踊りかな
下駄の音立てて踊り子帰りゆく
浅間山見ゆる坂道つくつくし
路地に風朝顔の蔓揺るるほど
流れゆくものに音無し秋出水
自転車を押して人ゆく草の花
米ニキ口酒一く本に桃を買ふ
長靴で栗の毬割る女かな
店先に栗の実を売る蕎麦屋かな

秋の雲

青谷小枝

夏終はるどこの鍵だかひとつある
そこいらのもので昼餉を扇風機
砂に胸埋め緑蔭のつがひ鳩
猫と金魚置きて一泊二日旅
ばつたりとであふ夜道のひきがへる
しまふもの出すもののメモ今朝の秋
町営の墓地の隣に茄子畑
取り込めば三つ四つ鳴りて秋風鈴
打ち打ちて行く真昼間のほうせんくわ
秋の雲片尻掛けて吸ふ煙草

白芙蓉

瀬島洒望

夏を病む真白き夜具に寝かされて
漁り船もやふ運河に海月ゐて
路線バス並ぶ駅前夕焼けて
白芙蓉咲く球場の裏ゲート
走り根を踏む滝音に誘はれ
貝ボターンぽろりと落ちる今朝の秋
これはこれは刺身で出たる初秋刀魚
宿題の案山子担ぎて登校児
秋暑し教授は頭蓋骨を手
秋暑しアンモナイトの化石買ひ

パラソル

天野美登里

パラソルをくるくるまはし待ちあはせ
稲の葉を跳び稲の葉へ青蛙
外灯をうつす流れや夜の秋
宿帳の墨のにほひやばつたんこ
葉掘る有明海を見下ろして
すれちがふ列車に揺るる葛の花
秋風は裏の畑のめうがにも
田の縁にさざなみ届く野紺菊
いたどりの花は湖への道すがら
縁側の廊下に埃鉦叩

秋 燕

藤井美晴

いつも来る山鳩がゐる藍の花
岩塩の塊痩せて夏終る
秋日差し削りたてなる鉋屑
電柱の裾の草むらちちろ鳴く
橋を過ぎ次の橋まで曼珠沙華
閑伽桶を置いて休らふ赤のまま
手のひらを当てれば灼けてゐる墓石
山巒を下りて来る風くさひばり
そよ風に重たく揺らぎ杜鵑草
ディングーのマストを掠め秋燕

とんぼ

白石正躬

グライダーが川辺にならぶ今朝の秋
朝涼し椀のみそ汁さましゐて
新涼の渡船場にバス定期便
土手に出て夜の秋風に吹かれけり
木の間より秋の日向へ乳母車
日曜の夜の川辺のきりぎりす
ゴルフボール水澄む池のあちこちに
雨あがり畑の棒にとんぼゐる
秋の空ながめて畑にひと休み
萩の花こぼるる道の車輪跡